

金田平一郎『昭和四年 日誌』

和仁, かや
早稲田大学法学学術院 : 教授

梶嶋, 政司
九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門 : 助教

<https://doi.org/10.15017/1957720>

出版情報 : 法政研究. 85 (2), pp.1-18, 2018-10-15. 九州大学法政学会
バージョン :
権利関係 :

金田平一郎『昭和四年 日誌』

和仁かや・梶嶋政司（翻刻）

はしがき

本資料は、九州帝国大学法文学部で法制史講座を担当した金田平一郎博士¹⁾（一九〇〇～一九四九）自筆の日記を、和仁かや（法学研究院・法史学講座／本稿執筆当時）、梶嶋政司（附属図書館付設記録資料館・九州文化史資料部門）の両名により翻刻したものである。

金田は昭和三（一九二八）年一月に講師に任命され、同五年二月講座担当助教授となり、同一五年五月に教授に昇任、同二四年の在任中に病没した。近世の法制史、就中債権法や比較地域史研究の先達として知られるが、昭和九年設立の九州文化史研究所を拠点とした九州各地の歴史資

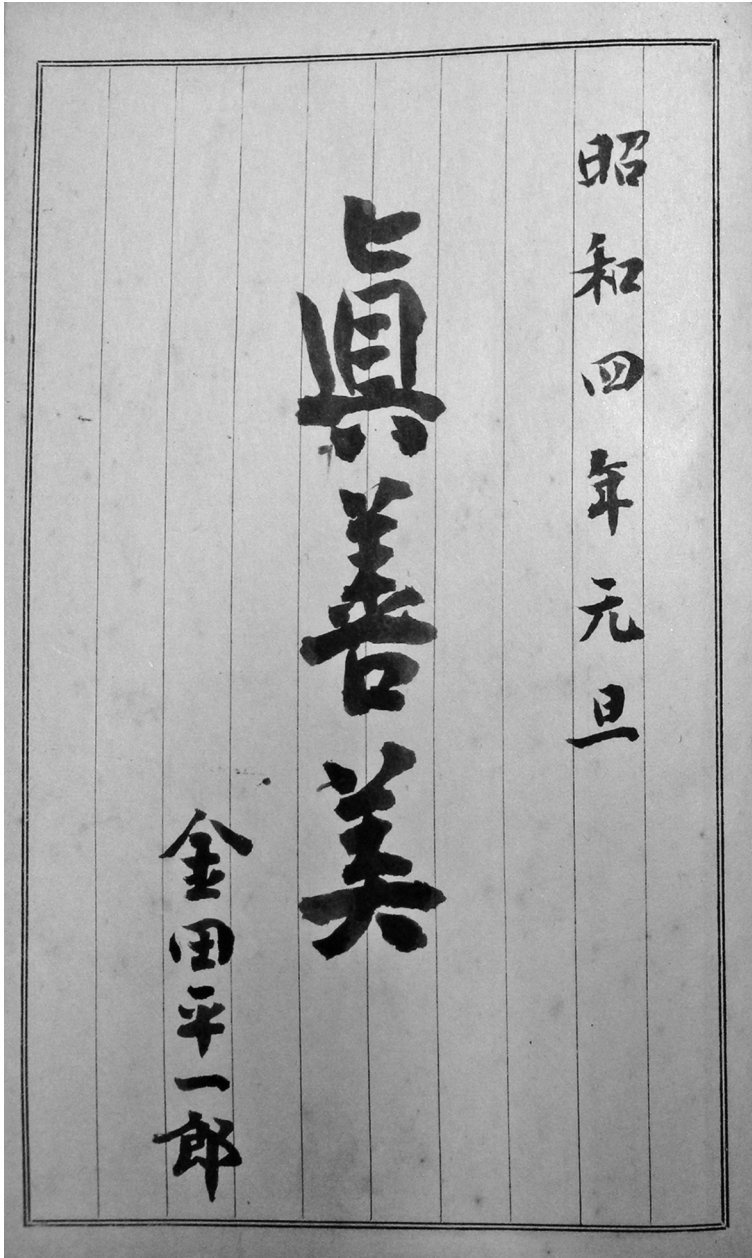
料の蒐集活動²⁾や附属図書館長としての活動をも通じて、大学及び法文学部における蔵書形成にも大きな役割を果たした。没後法文学部が蔵書の一部を購入し長らく分散配架されていたが、二〇一七年の夏に集約されて「金田文庫」³⁾が実現、同時にご遺族より本『日誌』を含めた所縁の諸資料の寄贈を受け、併せて同文庫に収められている。

本『日誌』が執筆されたのはちょうど九州帝大着任時、折しも着任先の法文学部はいわゆる「内訌事件」⁴⁾による混乱の最中であり、自身も早々にその渦中に置かれることとなった。目下、寄贈分資料についてはすべて整理中のため閲覧に供していないが、大学史及び部局史上も貴重な資料と思われるゆえ、ご遺族の了解を得てここに翻刻・紹介する次第である。

翻刻に際し、旧字・異体字は原則として通用字に改め、読みやすさを考慮して一部読点を補った。また「」は翻刻者が付加した部分である。⁵⁾

（一）金田の詳しい経歴や生涯については、和仁かや「金田平一郎と九州帝国大学」『法政研究』八三巻三号（二〇一六年）、和仁かや・梶嶋政司・中川晃一「金田平一郎と九州大学附属図書館」<http://hdl.handle.net/2524/1913973>（九

- 大文献 (ノート ID: 1913973)、1101(18年)。なお九州
 大学法学部百年史編集委員会「九州大学法学部・法科大学
 院の歩み—1924年(法学部創設)から2012年まで—」
 『法政研究』八一巻四号(二〇一五年)も参照。
- (2) 梶嶋政司「草創期九州文化史研究所の史料収集活動
 —『探訪日記』の紹介—」『九州文化史研究所紀要』四九
 号(二〇〇六年)。
- (3) 九州大学附属図書館 [https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/
 ja/kaneda](https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/kaneda)。
- (4) 最近の詳細な研究として、七戸克彦「九州帝国大学法
 文学部内証事件」『法政研究』八一巻四号(二〇一五年)、
 同「九州帝国大学法文学部と吉野作造(一)(二・完)——九
 州帝国大学法文学部内証事件の調停者——」同八三巻四号、
 八四巻一号(二〇一七年)。
- (5) 基本的には大学関係者の名を付加するに留めた。とり
 わけ法文学部法科関係者に関する詳しい人物情報について
 は、前掲註1後段文献所収の「法学部百年史関連人物情報
 文献一覧」参照。



金田平一郎『昭和四年 日誌』

一月一日

意義深い四年元旦ハ明けたり、九州帝国大学講師（三年十一月十九日）として、日宗の行者として、夫としての夫々の第一年を迎へたるなり、精進せざるべからず、昨三年十二月四日東京を去り全七日初めて九州博多の地に下り立ちてより約一ヶ月九州の生活にも漸く馴れたり、兎も角も年の餅も搗きたり、さゝやかなるもくさぐさの馳走にありつきたり、廿二円の家賃も完済したり、調度も事欠くことなきに至れり、先づ以て幸福なる新年と云ふべきなり、本日は六時起床、冷水に身を清め神々に拝し法華経を誦誦し、つね子と二人酒を祝へり、元旦と云ふに朝来より風寒く雪を見るに至る、九州にも冬は来れり

午後風雪を冒して年頭の挨拶に出掛く、春日（政治）法文学部長邸を問ひ、武藤（智雄）助教授宅に立寄る、当地來任に際しては何から何まで配慮を受けたる恩人、厚く芳情を謝したり、屠蘇を受け雑煮餅を御馳走になりて辞去す、尚ほ風雪やまざり少しも積ることなし、大濠に下車して大澤（章）教授宅を訪ふ、賀詞を述べて去る、次いで大工原（銀太郎）総長邸に賀詞を捧げて帰宅す、尚ほ午后出掛

けに際し鎮守鳥飼神社に詣たり、この土地ハ菅公に縁故のあるためか、多く天満宮を見受けるが、鳥飼社内にも天満宮存置せり、神々に拝して真正の生活を祈願す、当地ハ敬神の念深きか、寒冷にも係らず多の参拝者の影を見たり、形式に囚はるゝことは勿論無意味にして益なきことではあるが、或る程度の形式は我等凡人にとっては一の精進の方便であると考へるので、この元旦を期して形式的な一行事を初めることになしたり、即ち昨年十一月廿七日に挙げた我々の結婚式に際し仲人柴田甚五郎先生の筆になる誓詞を出して共に誦し、年月を記入し我々兩人夫々記名をなしたり、これ誓詞に悖ることなく家庭生活人間生活の完成に精進するの氣を新たにし強ふするのよすがにもと思ひたればなり、以後我家の行事の一として毎年の例とすることに決めたり、夜に入るも天候悪し、炬燵に入り改造新年号を読みなどし、四年元旦を平和に過したり、三十才の第一歩を踏み出したり、而立の年老いたる哉の感なき能はず

一月二日

朝来半鐘の音に醒めたり、消防出初式にてもあるならん、風やまず、尚ほみぞれを見、寒氣強し、終日閉ぢ籠る、雑誌を読むのみ、小木君父に手紙を書き、九州の正月の行事

など便りす、無為の日が続くと屈托する、早く学校へ出掛けたきものなり、十七日から初める講義の草稿も気になるが、家では何も出来ないものなり

一月三日

三ヶ日の雑煮餅も芽出度く食ひ納めた、一日五個、二日六個、三日七個、餅ずきの自分もこれ以上はいけない、今日は雪が積った、一二寸の雪量があつたらしい、雪だるまも所々に見える、終日無為にぶらぶら下手な謡曲をうなつたりする、金のいらぬお正月だ、しばらく振りで落付いて小説を読んだ、何でも努力がいるものだと云ふことがわ〔か〕る様に思へる、

一月四日

今日も雪、しかし寒気ゆるみ時折り陽かげさす、午後春吉四十川に三田村（一郎）教授を訪ふ、不在なりしハ残念、帰途伊藤省君を訪ひ色々歓待を受け、夕食を馳走になりて帰る、伊藤君不相変元氣、自信強しために前途多望と思ふ、しかし少し強さをあらはし強ぎはしまいか、しかしそれもいゝだらう、古本屋で嘉永版大成書状鑑（三十錢）を購ふ、帰宅すれば文求堂より宋刑統（十円）届く、見出しを書い

たり蔵書印を捺したり、愛無教時、新聞屋元旦号からの福岡日日を持って来る、中田（薫）、三浦（周行）両博士より賀状来る、

一月五日

多少天候恢復したが、まだ時折雨を見るの悪天氣、さっぱりした日が欲しい、こちらへ来て荷ほどきや引越しに手伝つて呉れたちいさんが来る、年末頼んでおいた下女事に就て、下女を置く身分ではないが三月の出産を控えて居るので、何とかとしよりも欲しいと思つたので、一人あつたが高いのでやめた、福岡人は大変親切気がある様だ、このぢいさん又然り、午后近くにある宇賀田（順三）教授を訪ふ、所用とかですぐ帰る、途中菊池（勇夫）助教授を訪ふたが皆留守空しく帰宅、又一日を無為に過した、やっぱり正月は家に居て物の本でも読んで居る方がいゝと思つた。漱石のものを引き出して読んだり雑誌を見たり、正月はやっぱり正月だ。

一月六日

十時半朝食、正月料理の持越しにいさゝか閉口、話しずきの、そしてこの家を見付けて呉れた洗濯屋が来る、上げて

餅など馳走する、学校の職員名簿をかって呉れと云ふので貸した、仲々に商売上手らしい、午後掘し物でもと思つて近所の古物屋を二三軒まわつた、何も見当らない、出した賀状が二三受取人不明でかへる、何だかいやな気持がする、しかし葉書には大変遠路御苦労であつたと思はれた、

一月七日

七草粥を喫し、初登校、誰もまだ見えぬ、先ハ一番乗りである。武藤〔智雄〕君来校、小生私室でしばらく歓談、共に昼食す、その節、法制史の年表を共々作成してはどうかとの話であつたが、大讚成、その中ぼつ／＼初めようと思ふ、まことにいゝ企てである、その中佐治〔謙讓〕助教授来らる、色々話しをする、皆帰られてから講義案を少く書く、四時すぎ退出、帰路儀助煮をかふ、古本屋で続々群書類従第七法制部を買ふ、二円、これで続々の法制之部を揃へた、気持よし、京北から一金拾参円也、年末手当を送つてくる、

新校群書類従来る、又和歌部少しうんざり、早く法制史干係のものゝあるのがほしい、此方の気持を本屋が知つてわざとそらして居る様にさへ見える、博多芸者の盛装したの一人を見る、うつくしそうだ、

一月八日

学校からの帰路大澤〔章〕教授を訪ふ、不在、隨筆を読む、一月九日、少し暖かくなる

高柳〔真三〕君から來信、十二三日頃仙台に行き開講とか学校で菊池〔勇夫〕助教、今中〔次麿〕教授に會ふ、歸路本屋で本庄〔栄治郎〕博士の日本社会経済史を（改造社経済学全集本）を買ふ、通読する、ジャーナリストイックである、軽い叢書の性質上致方ないかも知れないが、一体に日本経済史、現在のものは少々甘い感じがする、

一月十日 木曜

今日は十日戎とかで町は賑やか、思ひがけなく中田淳君から賀状来る、学校へ電話ありて、常子と玉屋、不二屋へ行く、子供の布団やら着物地を買ふ、仲々金がかゝる、良平にネクタイを送ることにして買ふ、又犬がすぎだから有田焼の犬を買ふ、仲々いゝ、一しよに田舎へ送らうと思つて鈴屋おこしを買ふ、だん／＼講義案作成の能率が上る、十七日から初めることにする、十四日に協議会があるとか、学校より自宅へ回状来る、

一月十一日 金曜

陽春三月の暖かさだ、学校の食堂で武藤（智雄）君に逢ふ、二月に奥さんがお産をするので、丁度持つて来た塩釜様の御守札を御貸しすることにした、講義案も大分出来た、大澤（章）さん僕の室へ来られる、高柳（真三）君より来信、東京行の田中和夫君に逢ったそうだ、

一月十二日 土曜

一日家二居る、つね子お医者に行く、至極健康の由、只少し内膜炎の気味あるとか、しかし心配なし由、安心、仙台鹿島氏に近況奉告、

一月十三日 日曜

馬鹿に暖い、畳を上げて新聞を敷いたり、すきま風をふせぐ用意などをした、安借家の悲哀、早く家でも建てたいと云ふ老成気分もおこる、陽なたで随筆を読む、呑気で氣持がいゝ、又法制史の淵源になる様な記述もある、記るして置くべきものだと思ふ、目に見えぬ后人への寄与は大きい、午后散歩に出る、鳥飼には盛んに家が出来る、見るこゝとがすきだから一々見て歩いた、今川橋で今中（次麿）教授に会ふ、御令嬢二人を具して愛宕山行の帰路とか、共に

少し散歩する、夜に入りて雲濃くボツ／＼雨も見る。松田力治君から来信、偶成句一句『暗の色みさだめにけりはつ鳥』あり、大分精進して居られる様子、

一月十四日 月曜

午後より法科協議会開かれ、夜九時に至つて散会する、協議事項中東大三瀧（信三）教授招聘につき、その障りとなりて居る東（季彦）教授、辞表を総長へ申達するの件を明后日教授会へ提出すべき旨を学部長宛に申立つることを決議した、法文学部当面の問題に就て法科そのものは何等係る所なき旨を一般に表明する方法としても最良の手段なりと一決す、皆つかれたる、正に努力を要するの時、

一月十五日

登校直ちに浅野（正一）助教授より召集されて集り、春日（政治）学部長に前夜の決議執行を請求した、仲々応諾せず、又々六時過ぎまで部長と我等九人対峙して動かさず、まことにくたびれた、遂に快諾を得ず、只右の請求をなしたに止まり散会、他の方法を講ずることにして、兎に角明日開かるべき教授会に於て奮闘すべきを約し、それ／＼その下準備に出掛けた、自分はまだ講師で表面に立つて云々す

ることは出来ないが、及ばずながら先輩の努力を心に援助し成功を祈って居る、中田〔薫〕先生に事情を報告したいと思ふが、明日の形勢を見てからにしよう

一月十六日

午后から法文学部教授会開かる、学内何となく物々しく、新聞記者の影も多く見えたり、定刻に至るも所謂六教授出席せず法科、経済、文科の一部で開会した由である、それでも定足数に一名を欠き、法科側大いに気に病む、此日西山〔重和〕教授出席せず、武藤〔智雄〕君来りて、自分に迎へに行つてくれと云ふ、自動車でいそぎ行きしも、西山氏自己の立場ありとして動かず、己むなく帰る、遂に定足数を欠きつゝ投票に至ると云ふ、而して当日の議題東〔季彦〕教授辞表進達の件を賛するもの六票、否とするもの一票の結果を得たりと云ふ、散会夜の一時に至ると云ふ、まことに学内の事とも思はれず、一日も早く片付けて夫々の道に精進せねばならない、

一月十七日

高柳〔真三〕君、牧健二氏より夫々来翰、早朝学校より手紙にて本日午后一時よりの法科協議会の参集を通知さる、

各種の協議事項ありたれども、重大案件ハ昨日教授会の件につき、善後策に干してである、今日又散会九時に至る、本月初めて講義する、聴講者三十五六名、熱心にきいて呉れる様子、選科生にてもあるか五十才位の人も見えたり、気持悪るし、過労の気味なり

一月十八日

快晴、登校、武藤〔智雄〕君来室しばらく話す、昨夜総長を問ひし様子、総長ハ春日〔政治〕部長に明日迄に決定すべき旨を通ぜしとか、而してもし不決定の時ハ総長決断する由を通ぜしと、ために又明日教授会でも開催されはしないかとの懸念あり、夫につき又協議を要する様子なり、まことに〱骨がおれる、牧〔健二〕学士の日本法制史論、田中秀夫氏の羅甸文法を購入す、買ひたき本、買はねばならぬ本、山積し、

一月十九日

正午近く登校、宇賀田〔順三〕、菊池〔勇夫〕両教授助教授来室、これより協議会開会すと云ふ、実は昨夜学部長より教授のみに宛て、本日懇談会を開き、教授会の議事規則を改正して事務局を打開せんとする旨通告ありたりと云ふ、

こは六教授に有利なる方法なりとなし、法科ハ出席を見合はすことに一決、尚ほその旨を学部長に通ずるために来席を乞ひ、色々申達す、后、高田（保馬）、植田（寿蔵）両教授来り、出席を促すも出でず、明日又協議会を開くことに決して散会、七時、新聞記者の影多し、大坂毎日の記者と云ふにつかまるが逃げたり、各新聞にも色々の詳報あり、研究の出来ざることまことに残念、

一月廿日

大寒に入る、寒さ一入感ぜられる、午后から協議会、春日〔政治〕学部長を招じて教授会開催を要望する、山尾〔時三〕助教本朝出立明日十一時半着のよし、来電ありたりと云ふ、隣のおやぢの謡まがいのどら声には閉口、蓄音器で低級な音曲をやつたり何とも下劣な人間には閉口するばかり、早くそうした雑音を排する生活が出来ようになり度い、

一月廿一日

両角より富貴子、正夫両君の近影来る、午后から協議会、帰朝后東京在住中の山尾〔時三〕助教来り、法科の元氣万倍、

一月廿二日

良平より来信、父良平風邪とか、午后一時半より協議会、五時より教授会、最後の決定を見るの機至る、多方の不安を残して、田中〔和夫〕君と共に帰る、よき決定を祈りつゝ吉報を待つ、

一月廿三日

昨夜の教授会、竹内〔謙二〕教授欠席のため流会となると云ふ、或る種の暴力が動いたためとか、登校すれば直ちに協議会、本夕又教授会を請求することにする、折柄春日〔政治〕部長自ら総長の命に随ひ、東〔季彦〕氏辞表を進達すと云ふ由伝わる、然るに又教授会を開くと云ふ、更に開かずと云ふ、皆あつけにとられる、今中〔次麿〕、大澤〔章〕両教授、総長に行き事情をたゞすに、部長、東氏の辞表を出し、更に自己の辞表を出し、興奮して去ると云う、益皆狐につままれた体なり

只明日午后二時より評議員会開かれ、法文学部教授会の組織を変更することを議すと云ふ、これは助教を排するものであつて大いに警戒を要することである

一月廿四日

第二回目の講義をする、学生約十五名程になる、皆文科史学部のものらしい、夕方よく来るぢーさんの娘を女中に貸すと云ふので細いことをきめに赤坂門で下車する、一寸ぢーさんるすで、武藤〔智雄〕氏を訪ふ、しばらく話す、私の身分に就ても大分考慮してくれてゐる様子感謝する

一月廿五日

終日家に居ることにしたが、午后ふらりと出て古物屋で両替の天秤の様に思へるものを見る、買ひたくなる、一応しらべてからにする、中田〔薫〕先生に一寸書いた、改造など漫読、いゝ日待つばかり、今年の僕の運勢は三四月頃いゝ地位を得ると云ふ、そうした事まで心において早くいゝ日を待つてゐる

一月廿六日

登校、協議会、本日一昨日評議員会で決定したのに其まゝ教授のみの教授会を開催する由、皆驚く、総長はそれを命ぜずと云ふ、ことごとくに至つては万止む、私としても覚悟せねばならぬ、当然復職が可決されることゝ思はねばならない、いづれは運命又いゝこともあらう、仏に帰依する自

分には何の屈託もない、全てはなる様になる、只山尾〔時

三〕助教が、自分を商法助教に推し将来法制史に転ぜしめる策をとりたいと云ふ、まことに御好意を謝して居る、そのことを中田〔薫〕先生に申上る、つね子ハくやしが、自分としても気持はよくない、しかし致し方がない、

一月廿七日

ぐっすり寝込んで九時頃眼覚める、三樹君親子三人の写真来る、気晴しにつね子と中洲へ行く、三樹君の子供郁子君にフェルト草履を送る（二円）、夜は文藝春秋を読む、平気で居ても今は何にも出来ない、しかしこれも試練だ、色々心に浮かむこともある、しかし何も云ふまい記すすまい、全て男らしく正しく、結果は問はない、

一月廿八日

終日在宅、三樹君から支那紙幣を三枚送ってくる、郁君肺炎とか、伊藤正夫君から山本の海苔を送ってくる

一月廿九日

午前十一時二十九分、三瀨〔信三〕博士来福、博多駅に出向へる、山尾〔時三〕助教に手紙を書く、小木君より送

り物の礼状来る、松田力治君より来状、不相変芭蕉研究の様子、静かな境地を惹惹む、今中〔次鷹〕教授の話しては二十六日の教授会で滝川〔政次郎〕教授復職を決定したが、総長之を受諾せずと云ふ、而してその辺でまづ問題は一段落の様子なりと、武藤〔智雄〕助教授と自分の室で昼食する、明日から少し勉強したいと思ふ、

一月卅日

三瀧〔信三〕先生と学校で会食、色々御話し承る、高柳〔真三〕君に発信、

一月卅一日

中田〔薫〕先生より来信、色々はげまされる、高柳〔真三〕君より来信、当方の事情を案じて来る、二月初め迄仙台滞在なりと云ふ、夜、回章来り、二日夜、新三浦で三瀧〔信三〕先生歓迎会を開くと、出席のことにする、

二月一日

寒し、出校、武藤〔智雄〕氏に面談したいと思へど機会を得ず、急に三時から協議会あり、三瀧〔信三〕先生兼任を促進のこと東京へ打電のことをきめる、夜つまらぬことで

いさかいあり咄々、

二月二日

午后六時より新三浦の水焚で三瀧〔信三〕先生の歓迎会を催す、藤沢〔親雄〕教授、佐治〔謙讓〕助教授欠席の外、全部出席、当学部時局に就て色々談合、初めての水焚として仲々に美味、帰宅十二時、床に入る頃より雪しきりなり、

二月三日

福岡にはめぐらしと云ふ雪降る、二寸程積る、午后武藤〔智雄〕氏を訪ひ、色々御願ひし来る、教官間意思の疎通を欠くものあるは弱る、奥様明后日出産予定日なりと、帰路天神町に出て古本屋をあさる、電停際の古本屋にて寛政六年の屋敷永代相伝売渡証文を二十銭にて入手す、すっかりうれしくなる、今日ハ節分豆など煎る、釜井君に手紙す、

二月四日

立春と云ふに寒い、国家学会から岡義武君より来信、拙文国家学会雑誌二月号に載ると、午后より法科・経済科有志懇談会あり、現今の教授のみの教授会を認めるや否や、認めずとせば、如何に進退すべきや等談合する、木村さんよ

り来信、安藤常三郎氏、病篤しと、

二月五日

登校、群書類従、帝国文庫、随筆大成来る、武藤〔智雄〕氏より電話ありて、夕方御伺ひする、色々御意見を承り、さしあたり三瀧〔信三〕先生に御話しすることは差控へた方がよからうと云ふことに、そのことを（山尾〔時三〕氏私信なるを以て、今自分から之を三瀧先生に申上るは如何かと存じての旨を）中田〔薫〕先生に御報知する、父より来信

二月六日 初午

終日閉ぢ籠るつもりで午后から昼寝をして居ると、学校から小使が協議会開催を通告し来る、出頭する、大した事もないが、今日の教授会で議事規則改正委員に関する件を付議するにつき協議す、法科内部にも或種の暗闘あるらし、面白くない、つね子病院へ行く、子供は大いに元氣と、うれしい、つね子のからだも別条なしと、安藤、釜井両家に贈物をする、柴田先生に御便りする、終日無為、

二月七日

午後六時二十分発ニテ三瀧〔信三〕先生帰京せらる

二月八日

終日家居、神皇正統記を読む、高柳真三君より来信、中田〔薫〕先生よりの伝言として、自重すべき旨を書きよこさる、つね子福岡にての初めての丸髻を結ぶ

二月九日

家に籠るつもりで居ると回章ニテ協議会ヲ知らさる、来る筈だった女中をことわられた、講義補充に関する点で大論議、八時半散会、毎々だからいやな空気がある、僕の性格と相容れない一この性格あるを知る、いやな話だ、つまらん所にこだわる、武藤〔智雄〕氏、奥さん出産か、欠席、国家学会雑誌来着、自分のものはその誤植と不足な筆とを見出すに汲々、一寸も面白くない、中田〔薫〕先生が、宮崎〔道三郎〕先生が自分のものをよむのはびく／＼ものと云はれたと話されたが、事実だ、

二月十日 実に寒い

終日、国家の自分の論文の訂正に過ぎた、

二月十一日

九州ニテノ初ノ紀元節、午后ふらりと古物屋を素見に行く、一軒ニテ明治初年の借金証文を見出し買はんと云ふと、その証文記名の人に済まんからとて諾せず、いさゝか妙な気がした、しかし朴拙な気風を窺ひ知る、或家ではうるさい様な顔をされ、今日はあぶれと観念する、楠田病院に立寄ると、武藤家で女子本朝出生との事、御祝を述べて去る、夜は来月号に出すべき本正月（国家）の正誤表をつくる、時間が早く仕事が殆んど出来ず、いら立つのみ、寒さ去らず夜に入りて白いものちらつく、父に国家学会雑誌本月号を郵送する、つね子、僕の羽織を縫ひ初める、

二月十二日

出校、寒い、まれなる酷寒なりと云ふ、みぞれ、風強シ、岡（義武）氏宛二月号正誤表を送る、阿部市五郎君に通信する、積文館に立寄り二十冊ほど注文する

二月十三日

出校、

二月十四日

つね子と武藤（智雄）氏奥様を御見舞、赤ちゃん元気、同氏と共に出校、特別講義を了る、釜井君より来信、良平より来信、その中新聞社に入ると云ふ、可なるべし、田舎へ手紙出ス

二月十五日

鯛チリを食す、箱崎神社に初めて詣でず、

二月十六日 土曜日

めっきり暖くなる、学校で武藤（智雄）氏の来訪を受く、今度生まれた子のために送ると云う、又女中さんにオムツの作成をなさしめると云ふ、芳志を深謝す、帰宅すれば、つね子が近所の焼芋屋のおばさんに頼んで置いた女中を一人つれて来て居た、早速雇ふことにした、三宮、柴田先生奥様両便ある、三宮君にかく、

二月十七日

終日閑居、雨ふる、田舎のよし江より来書、

資料
二月十八日

牧野英一先生来福、十二時二十九分博多駅に向ふ、武藤〔智雄〕氏と昼食、午后しばらく振りで気が乗って勉強、今日山尾〔時三〕氏見える、昨日来福されたとか、女中来る、きよと云ふ、年十四、

二月十九日

牧野〔英一〕先生の御話を四階で聞く、四時から協議会、不相変論戦あり、来学年レーアプラン〔Lehrplan〕を定む、自分は一週二時間一年継続のことに内定

二月廿日

午前出校、午后留守居、つね子、女中と外出、夕方武藤〔智雄〕氏来訪さる、京北で教へた前田慶祐君、二日市に在住とかにて手紙をよこす、嬉しい、早速返信

二月廿一日

昼食后、牧野〔英一〕先生の漫談をきく

二月廿二日

夜十五年入学の八木延身君来り、法制史上より見たる学校

教育なる論文を見てくれと云って持って来た、君ハ広島高師出身なりと柴田先生より丹冊を送り来る、先生及南木先生に発信

二月廿三日

法科協議の会合、給料日、国家学会より四十四円送付さる、

二月廿四日

終日無為にころく、母より来信、

二月廿五日

京大より講演に來られた竹田省博士の歓迎会を新三浦に開く、出席、何か、京大出身文科系のものが、来福中の牧野博士をさしおいて、竹田博士のみの招宴を開いたとかにて、フンガイする者あり、新三浦参集者ごく僅少なりし、本夕、野津〔務〕教授、三浦周行先生の御親戚とか云ふことを初聞す、

二月廿六日

正午牧野〔英一〕先生歓迎宴を四階にひらく、続いて協議会、不相変ゴタ／＼、八時半散会、

二月廿七日

牧野〔英一〕先生午前中にて講義終了、午後二時二十五分
汽車にて出立、本日は八幡宿りの御予定とか、駅迄送る、
八木延身君来る、助手願を出すとか云ふ、高柳真三君にカ
ステラを送る、小木君より来信

二月廿八日

終日ぶら／＼、夜きよと黒門へ行李を買ひに行く

三月一日

小雨、暖かし、武藤〔智雄〕氏宅へ御祝にかつを節の箱
（五円）を持って行く、今日は開学記念日なり

つね子の腹は益々大る、あまり中で活動されていたいそう
だ、祖父、母、路子、よし江に発信、白川子爵夫人より来
書、梅信しきりなり

三月二日

三月三日

雛節句、寒い、学校開放日、本年は農学部当番とかにて、
農学部室に各学部出陳せり、さしたるものもなし、農業経

済研究室出陳物中に二三未見のものありし、

三月四日

宮本〔英脩〕教授来任、新三浦にて歓迎会

三月五日

三月六日

教授会、学部長選挙の、文科之教授大島〔直治〕氏を立つ、
法経大森〔研造〕氏を立て見事当選、白票一、大森十三、
大島十一、今日選挙前、片山〔正雄〕教授推薦演説に来る、
珍妙なる話をきく

三月七日

法科協議会、佐治〔謙讓〕氏、東洋法制史専任講師を推挙
する、少し話が変わ、僕と武藤〔智雄〕氏と佐治氏とで、
そう云ふ専任をおくかを先づきめ、それからその人に就て
きめることになった、佐治氏少しフンガイ、我々をうらん
で居るらしい、法政から羅馬法答案を送らる、百十六枚に
は驚きたり

三月八日

宮本〔英脩〕教授、京都へ帰らる

中田〔薫〕先生に御便りする

三月九日

法政羅馬法答案採点を終らす

三月十日

暖かし、つね子と共に三十分散歩、午後から百々道で素人角力を見る、

三月十一日

烈風にして寒し、みぞれも降る、阪本安房氏から十五円〔谷氏成功謝金の切半〕を送らる、小木君よりおしめ送らる、皆難有し、原田慶吉君より来信

三月十二日

非常に寒し、今中〔次麿〕教授より印度政治学を拝借、

三月十三日

寒さ去らず、つね子出産間近になるために終日在宅

三月十四日

夜十一時過ぎ、つね子腹がいたみ出したので驚いて楠田病院に入院させ、自分も宿つて来る

〔三月〕十五日

variなし、一寸生まれそうもなくなる

三月十六日

協議会、夕方から箱崎緑壽園にて山尾〔時三〕助教授歓迎、武藤〔智雄〕助教授送別宴を開く、少し早めに失敬して病院に寄るも異状なし

三月十七日

異状なし、散歩に出歩く、藤田と云ふ親切な附添婦が来て居るので安心

三月十八日

まだ生まれん、当人は勿論楠田博士その他皆が鶴首して居る

三月十九日
以後毎日楠田病院詰め

三月卅一日

京北時代の教へ子福田平一、前田慶祐両君来訪さる、折悪しく不在、残念至極
昨日父より男子の名を選定し来る

四月一日

朝六時、女子出生、つね子も子供も元気、男だとばかり信じて居て女、一寸がっかり、しかし女子又可、とにかくいゝ、非常な安産であった由、皆信心の余徳なるが故なり、電報葉書等を出す、落付いた様子、落付かん様子一日、子供の名は真智子にすることに、余り待ち長かった、偶意であるが文字はたくましい、愈々親父になった、子の一生の幸福を念ずるのみ、高柳（真三）君にも発信、お隣りの山本君の奥様、病院に見舞ってくれる

四月二日

西公園の桜見頃とか、真智子元気、つね子も元気、この土地ハ四月三日が雛祭り、真智子のために内裏様を買ふ、ポ

ンボリも買ふ、だんく親らしい気持になる、出生届を田舎に頼む

四月三日

朝の内はお雛様の飾り付けで過ごす、午后病院へ行く、今日初めて真智子母の乳を吸ふ、大分出るらしい、病院の看護婦諸嬢に桜餅最中をくばる

四月七日

真智子益々元気、つね子の乳も出る、午后協議会

四月八日

積尊降誕会、中田（薫）先生、祖父に発信、法科が中心になって福岡法律専修学校が出来上る、五月から開講の予定なり、法制史助手志望の八木延身君不採用に決定する

四月九日

出校、法経合同にて雑誌発刊の件を議すれど財源の点にて頓座、不成立に終る、父より百円送り来る、不足にて閉口のため浅喜町に頼む、

資 料
四月十日
終日在宅、
小木君、
良平より来信